

研究ノート

『源氏物語』の「行くへ知られぬ」考

塩田和子

るに違いない。そのことは、准拠論からするとその歴史性における解釈ではなく、むしろ神話性における解読の問題である。ここでは、須磨巻の光源氏の歌を中心として、『源氏物語』テキストの重層性のその一端を明らかにすることを試みたい。

『源氏物語』テキストは、伝承史的方法⁽¹⁾の視座からすれば、基層から表層に至る幾重にも重ね合わされた、しかもひとつの完結した伝承構成体である。ここでは、伝承の小さな端切れとしての伝承断片はどのよう

な構造をもつのか。また、『源氏物語』テキストがどのように伝承を織りこんでいるのか。そのことは、織りこまれる伝承のほかならぬ伝承であることの保証をテキストにおいていかに求めるかという問いに連なっていく。

片を組みこんでいる。その最小単位は、徴しづけを担った鍵言葉 key word と、その縁取りとしての決まり文句 typical expression の組み合わせである。⁽²⁾

今、この小論で扱おうとする光源氏の歌は、ここでいうところの伝承断片であり、そこに組みこまれた「行くへ知られぬ」が、決まり文句である。この「行くへ知られぬ」という決まり文句が、いかなる鍵言葉と結合することによって、『源氏物語』テキストのうちにどのように組みこまれたかを考察することが、『源氏物語』テキストの基層と表層を明らかにする手がかりとなる

かりそめの道にても、かゝる旅をならひ給はぬ心地に、心ほそさも、をかしさも、めづらかなり。大江殿といひける所は、いたく荒れて、松ばかりぞ、しるしなりける。

から国に名をのこしける人よりも行くへ知られぬ家居をやせむ

(須磨二・30頁)⁽³⁾

「から国に」の歌は『源氏物語』の注釈史においてはいかに把握されてきたか。まず紫明抄が「楚屈原をいふ」⁽⁴⁾とし、続いて河海抄が「楚の屈原がはなたれたりし事といふ歟」⁽⁵⁾としている。それに対し花鳥餘情

かになるに違いない。さらに、そのことを通して、ここで問題にしようとする「行くへ知られぬ」が、単なる常套的、形式的表現ではなく、まさに伝承性を有する決まり文句として定位するものであることを証することができると思われる。

「行くへ」は、須磨巻の当該例を含めて『源氏物語』に三十六例を数える。そのなかでもテキストに織りこまれた歌においてはしばしば認められる表現である。今、考察の対象としている「から国に」の歌を除いて、それらを次に列挙してみる。

- ①世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて(花宴一・309頁)
- ②来し方も行くへも知らぬ沖に出でゝあはれいづくに君をこふらむ

(玉鬘二・331頁)

- ③ゆくへなき空に消ちてよかぶり火のたよりにたぐふ煙とならば

(篝火三・41頁)

- ④なれこそは岩もあるあるじみし人のゆくへは知るや宿の真清水

(藤裏葉三・203頁)

- ⑤行くへなき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ(柏木四・17頁)

- ⑥この春は柳のめにぞ玉はぬく咲き散る花のゆくへ知らねば(柏木四・46頁)

- ⑦大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂のゆくへ尋ねよ(幻四・213頁)

- ⑧たち花の小島は色も変らじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ(浮舟五・237頁)

- ⑨ありと見て手には取られず見れば又ゆくへも知らず消えし蜻蛉(蜻蛉五・336頁)

- ⑩心こそ憂き世の岸を離るれど行くへも知らぬあまの浮木を(手習五・392頁)

これらの歌にみるかぎりにおいて、「行くへ」が「知らず」あるいは「なき」と結びついて表れる語であることが知られ

るのだが、ここではまず、これらの歌から

鍵言葉を取りだすことをしたい。その作業は、個々の歌について、どの人物がどのよ

うな状況と場面において詠まざるをえなかつたかを説明することは異なる。それは、『源氏物語』テキストが、ほかならぬ物語

という俗なるテキストとして編集される際に織りこまれる主題的意図にかかわること

がらである。したがって、より表層のレヴェルに属する問題である。ここではむしろ

そうした編集的部分を剝離し、歌のなかにもどるような徴しづけを負った鍵言葉が配置

されているかを明らかにする必要がある。右にあげた十首の歌のうち、④・⑤・⑥

⑦の四首がなんらかの形で「死者」について詠まれたものであることがまず注意さ

れる。といっても、編集されたテキストにおいて読みとることのできる意味の次元に

とどまって、ひとしなみに「死」とすることであってはならないだろう。この四首に

あつて、「行くへ」が問われているのは何か。それは、

④みし人

⑤空の煙

⑥咲き散る花

⑦魂

として取りだすことができる。歌のなかにあつて、これらは単なる景物を示す語でないことは明らかである。あるいは、死者をしのぶすがなどではない。にもかかわらず、これらの語が選びとられてくる理由は何なのか。今はこの世にはいない、しかし、かつては確実に存在したものをどこに求めるのか。「煙」にしても「花」にしても、それ自体は可視的なものである。と同時に、それはあくまでも、「空」へ立ち昇ることにおいて、また、「散る」ことにおいて、それがやがて消失するぎりぎりの限界までをとらえることができるにすぎないということである。その見える彼方こそ、「煙」

や「散る花」という形姿においてとらえられる亡き人の「魂」の回帰すべき異界ではなかったか。それは、この世のどこかにある特定の場所ではなく、まさに方位性においてしか想定することのできないコスモスである。その方位性において、いわば可視と不可視のはざまにある「煙」や「散る花」は、境界性、媒介性を徴しづけられた語であるといえる。そうした語と結びつくことによって、「行くへ」なる語は、この世の水平の方向性を超えた異界への垂直の方位性を担いうる語として定位する。

その意味で、「魂の行くへ」を「大空」において尋ねるとする⑦の歌には、より明瞭に基層を透かし見ることができるといえる。この歌は、可視的な、したがって一見景物とみえるものささい、つまみこまな性、媒介性を孕む。むしろ、直接異界に対して呼びかけているとさえいえる歌である。ここに、「行くへ」が「魂」なるより根源的な存在を示

す語と結合することをみておくことは重要である。そのことは、古注以来「大空を」の歌とその典拠とされてきた『長恨歌』との伝承の並行関係をいうことにおいてである。河海抄は、「此歌の心は蜀方士が楊貴妃にたつねあひたりし事也⁽⁹⁾」としているが、こは、こちらの俗なる存在として固有の名を与えられた人物としての楊貴妃を尋ねることではないはずである。まさに「魂を尋ねる」という伝承断片を織りこんだことにおいて、「大空を」の歌と『長恨歌』とは、テクストの基層において通底するといわなければならない。

このようにみてきたとき、さきの歌のうち、①・②・③について、それらがより表層の修辭性に傾くとしても、やはり、境界性、媒介性を孕む

①月

②沖

③空

という鍵言葉との結びつきを示していることはみてとってよいであろう。

さらに、⑧を問題にするならば、「行く

へ知られぬ」という決まり文句が「浮舟」

なる鍵言葉と結びつくことよって示され

る位相は、伝承史の視座から、「アイデン

ティティ」の「変換についての可能態とし

ての浮舟のペルソナは、まさに「ゆくへ知

られぬ」という述語的なコンテクストにお

いて認められる」として、すでに明らかに

されている。その際、「行くへ知られぬ」

とは、『イツヘ』にかある聖なるトポス⁽¹¹⁾

を志向する方位性において必然的に選びと

られた決まり文句である。それは、いうま

でもなく、「いづへ」と「行くへ」の「へ」

の同質性においてである。「へ」は「一定

の場所ではなくその周辺であり、ある場所

の中心や奥ではなくて端近なところ」であ

る。そこに境界的な位相をみることは可能

であろう。「行くへ」の「へ」も、見えざ

る異界に至りうる回路を潜ませる「へ」である

とみななければならない。

ところで鈴木日出男氏は、御法巻にお

ける紫上の「われ一人、行くへ知らずなりな

むを」という心中表現に注目され、「行く

へ」の語の『源氏物語』における用例を分

類・検討されている。鈴木氏は「行くへ知

らず」について、「人物の行方不明ないし

は生死不明を意味する成句的表現語句」で

あると規定された。この規定に対して、小

論の立場から、なお検討を加えたい。鈴木

氏は、まず人物かそれ以外、すなわち物象

かという区分をたてておられる。「その他

として分類されたなかには、さきに考察を

加えた⑤の「空の煙」・⑥の「花」・⑦の「魂

も含まれているが、これらは、「人物を物

象に見立てた例」とされている。

それは、ここでは、個々の伝承断片とし

ての歌を織りこみつつ編集されたテキスト

としての『源氏物語』の表層において読み

とることのできる意味である。ほかならぬ

物語として、男と女の「世」を基軸として

織りなされる俗なるテキストとしての『源

氏物語』において、まさに「人物」の担う

べき主題論の意味がかたどられるのは、む

しろ当然のことであるといえる。さらに基

層と迫りつつ、ほかならぬ伝承において、

これらの語そのものが担う意味と価値を明

らかにしなければならぬことはこれまで

に論じてきたところである。

さらに問わねばならないのは、人物の

「行方不明」とりわけ「生死不明を意味す

る」とされる理解である。はたして、「生

と「死」という二元的対立の枠組みをもっ

てすることで、「行くへ知らず」という語

の指し示す内実を解説することができるた

ろうか。とりわけ、氏が「明らかに死を意

識する」とされた⑦の歌の例と

雨となり、しぐるゝ空のうき雲をいづ

れの方とわきてながめむ

ゆくへなしや

(葵一・346頁)

生命の終焉において、まさしく「行くへ

ついて、この世において限定された「人の

との二例を「例外的」と断ずることで「行くへ知らず」のさまざまな位相が明らかになるのか。まず、鈴木氏のいわれる「生」

知らず」というところに、古代の生死観は示されているといえよう。それは、異界に

身の上」を意味する語であるのに対して、「行くへ」は、見えざる異界への方位性を

「死」が断絶をもって対立的にとらえられていること自体が、近代的な生死観によるものであるとしなければならない。鈴木氏は、これらの二例について、「いずれも死者の魂が空中を飛翔するのを前提とし、さらにそれらが漢詩文の投影によるという

おいて、ほかならぬ「知らず」ということばとの結合を必然とするといえる。鈴木氏のいわれる、「行くへ」が否定語を伴い、しかも「知る」と結びつくことをもって

示す例があることを考えるならば、やはり、「行く先」や「行く末」と同じくより表層

点⁽¹⁶⁾」での共通性を認められている。重要な

必然性は、始原的な「へ」の位相とかわる異界への方位性と、したがって、この世

えざる、それゆえに聖なる異界とを結ぶ回路を見出しえないとすることによって、か

響をいうことではない。より基層から引き継がれるところの「魂」の「行くへ」を尋

るものたる「人」からする異界そのものとそこに至る回路の不可視性によるとしなければならぬ。それゆえにこそ、伝承断片

であったのではないか。小論の考察の出発点とした「から国に」

ることによって、実は「死」を意味するにとどまらない、「行くへ知らず」の、より始原的なありようがみえてくるのではない

ある。それは、「行くへ」の語のみが負うことのできる伝承性である。「行く先」や

「行くへ知られぬ」に、「魂の行くへ」にかかわる伝承断片を基層にみることによ

て、新たな様相を帯びてみえてくるのではないか。そのことは、この歌が、ほかならぬ独詠歌であることとかかわってくる。須磨巻の歌は、「源氏が須磨へ出立する際の離別の歌と須磨における謫居の生活の歌と二つに判然と分かれる」という小町谷照彦氏の指摘に代表されるように、「離別」と「謫居」という主題的枠組みにおいてとら

えられてきた。あるいは、「その和歌の性格は、(中略)後半須磨謫居の部分は、都の女性たちとの贈答歌や、源氏と従者たちとの詠歌、訪れた宰相中将との唱和の歌、それに源氏の独詠歌等であるが、だいたい羈旅の歌の性格をもつ」といわれるように羈旅歌として位置づけられてきた。しかしながら、「から国に」の歌は、即境的景物を詠みこまない点で、「謫居」や「羈旅」の歌としての位置づけを超える独自の位相を示している。さらにいえば、異界への方位性において発せられるゆえに、この歌は

独詠歌たらざるをえなかったのではないかという予測を可能にする。小論では「行くへ知られぬ」の考察にとどまったが、「から国に」の歌について、さらに光源氏の「流離」といわれるもの構造とのかかわりに対して、稿を改めて論じることとしたい。

注

- (1) 「伝承史的方法」については廣川勝美先生『ものがたり研究序説 伝承史的方法論』(桜楓社、一九八五年)参照。
- (2) 同書、三五頁。
- (3) 山岸徳平氏校注『日本古典文学大系 源氏物語』(岩波書店)。()内は、巻名、巻数、頁を示す。以下、『源氏物語』の本文引用はすべて古典文学大系による。
- (4) 玉上琢彌氏編『紫明抄 河海抄』(角川書店、一九六八年)、六五頁。
- (5) 同書、三一―三二頁。
- (6) 伊井春樹氏編『源氏物語古注集成1 松永本 花鳥餘情』(桜楓社、一九七八年)、九五頁。
- (7) 伊井春樹氏編『源氏物語古注集成7 内閣文庫本 細流抄』(桜楓社、一九八〇年)、一一―一八頁。
- (8) 北山谿大氏『源氏物語辞典』(平凡社、一九五七年)、八一―一五頁。
- (9) (4)前掲書、五二―九頁。
- (10) (11) (1)前掲書、三四一頁―三四二頁。
- (12) 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂、一九六七年)、六四―七頁。
- (13) (14) (15) (16) 鈴木日出男氏「紫上の絶望——『御法』巻の方法——」『文学・語学』第四九号、一九六八年九月。
- (17) 小町谷照彦氏「源氏物語の和歌——物語の方法としての側面——」山岸徳平氏・岡一男氏監修『源氏物語講座』第一巻(有精堂、一九七一年)、一五一頁。
- (18) 寺本直彦氏「須磨のわび住まい」秋山虔氏他編『講座 源氏物語の世界』第三集(有斐閣、一九八一年)、二四五頁―二四六頁。